2018 年度

# 点検・評価報告書
## ーアセスメント結果の概要ー

## 文学部

# アセスメント・ポリシーに基づいた学習成果の測定および可視化についての点検・評価

2019.3.5.

文学部評価分科会

＜アセスメント・ポリシーに基づいた学習成果の測定および可視化についての点検・評価＞

１．現状の説明

１）学部の専門科目の学修成果（ラーニング・アウトカムズ）を測定するためのアセスメント・ポリシー（アセスメントの指標と方法）を策定し、実行しているか。それらの適切性を定期的に検証しているか。

文学部は学部の理念・目的に基づいて、ディプロマ・ポリシーの中に専門科目のラーニング・アウトカムズとして以下の 7 項目を明示している。

＜文学部専門科目ラーニング・アウトカムズ＞

（１）人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる。

（２）母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる。

（３）基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。

（４）論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。

（５）文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。

（６）学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る。

（７）人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。

そこで、上の各項目で求めている知識、汎用的能力、そして態度・志向性を、学生がどの程度身につけることができたのかを評価するための方針（アセスメント・ポリシー）を以下のように定める。

まず学部の各専門科目が 7 項目のラーニング・アウトカムズのどの項目の達成を目指しているのかを明示する一覧表（カリキュラム・マップ）を 2018 年度に作成して学生に示した（資料①）。また同年 7 項目のそれぞれの達成状況を測定・評価する際の基準をルーブリックとして作成し、これを学生に示すとともに教員の成績評価の際の基本的な基準とした（資料②）。なお、これらについては 2019 年度から履修要項にも明記する（資料③）。これらに基づいて、個々の教員は定期試験・レポート・小テストのスコア、予習・復習課題の提出状況、さらに科目が独自に行なうアンケート等によって、各科目のシラバスにすでに明示されている学修の「到達目標」の達成度を把握し評価している。

学部としての具体的なアセスメント指標としては､個々の教員が行なう上記の測定･評価に加え、①授業アンケートによる各専門科目の学修の「到達目標」の達成度の測定、②専門演習と卒業論文については独自の評価ルーブリックを 2019 年度から作成し、それに基づく到達目標の達成度の測定と成績評価（資料④）③全学および学部が定めている卒業要件の達成状況（単位取得状況・GPA）の測定、④TOEIC 等の語学試験のスコアや中国語等の語学能力試験の成果による言語能力の伸長度の測定、⑤全学で行なっている就業力判定テストなどを活用した論理的思考力や数的能力、コミュニケーション能力の測定、⑥各種免許・資格の取得状況に基づく学修成果の達成状況の把握、⑦その他「初年次セミナー」等の幾つかの科目で実施している独自の評価シートやルーブリックを活用した学修成果の把握を行なうことにしている。

以上の方針に基づく実行の初年度にあたる 2018 年度は、学部の学問の専門領域である 12 のメジャー・専修からパイロットとして基幹科目を選び、それらをカリキュラム・マップにしたがって 7 つのアセスメント項目別に分け、過去 3 年間の成績の推移とそれらの科目の授業アンケートにおけ

る「到達目標」の達成度の推移を点検・評価することとした。なお、過去 3 年間の成績の推移については B 評価以上の推移を中心に点検した。理由は、シラバスの「到達目標」の達成と成績評価の関連について全学共通に「現実的かつチャレンジングな目標」として B 評価以上を「到達目標」の「達成」としていること、および B 以上にあたる S 評価と A 評価については成績評価の厳格化の観点から、原則として両評価の合計を履修者の 30%以内とするキャップ制を採用しているからである。また授業アンケートを用いることについては、教員からみた客観的評価と学生から見た主観的評価の比較に一定の意味があると考えるからである。これらの点検によって、２つの推移の原因を探り、学部としての今後の授業改善につなげたい。なお、担当教員の交代その他の理由により、今回アセスメントできなかった科目等には▼をつけた。

以上のアセスメント・ポリシーと実行計画を一覧にすると以下のとおりである。

＜ラーニングアウトカムズ　アセスメントプラン＞

| アセスメント項目 | アセスメント指標 | ★アセスメント対応科目（パイロット科目） |
|---|---|---|
| **（1）人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる。** | 履修科目の到達度(成績)★<br>卒業論文の完成度（4 年次）▼<br>教員採用試験（社会・地歴・公民）の合格者数 | 文学研究法入門Ⅰ、英米文学概論Ⅰ<br>社会学概論、歴史学概論、社会福祉入門<br>日本語学概論Ⅰ<br>東洋文化史Ⅰ |
| **（2）母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる。** | 語学系履修科目の到達度（成績）★<br>TOEIC 等のスコア、中国語等の語学能力試験<br>教採試験の合格者数（英語・国語） | Oral Communication in English Ⅰ<br>日本語教育概論Ⅰ<br>中国社会文化論Ⅰ<br>Academic Writing AⅠ |
| **（3）基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。** | 履修科目の到達度（成績）★<br>卒業論文の完成度（4 年次）▼ | 日本文学概論Ⅰ、英語学概論Ⅰ、演劇論<br>日本文学史、社会福祉概論Ⅰ |
| **（4）論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。** | 履修科目の到達度（成績）★<br>就業力判定テスト（1 年次後期・3 年次後期・4 年次後期）▼ | ジャーナリズムの社会学Ⅰ、論理学Ⅰ▼<br>社会調査の基礎、メディアと社会心理Ⅰ |
| **（5）文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。** | 履修科目★<br>海外研修参加者・留学学生へのアンケート（研修終了後、留学からの復学時） | 比較文化Ⅰ、倫理学概論Ⅰ、国際社会論<br>東欧の歴史と文化、比較文化史概論 |
| **（6）学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る。** | 初年次セミナーの到達度（学び始めルーブリック・リフレクションシート）▼ | |

| | | |
|---|---|---|
| | 文学部の学びとライフデザインの到達度（アンケート）▼ | |
| **（7）人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。** | 履修科目到達度★　人間学の到達度（授業アンケート当該項目）▼<br>初年次セミナー到達度（学び始めルーブリック・リフレクションシート）▼<br>文学部の学びとライフデザイン到達度▼　社会福祉士国家試験合格者数 | 平和学、ジェンダーの社会学、児童福祉論Ⅰ<br><br>人間の安全保障 |

次に各アセスメント項目ごとの現状について説明する。

**①アセスメント項目（1）**

**＜人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる。＞**

〇アセスメント指標１：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）とした 7 科目では、B 評価以上の達成率はおよそ 7 割であり、さらなる改善が求められはするものの、概ね十分な教育と適正な評価がなされていると考える。過去 3 年間（春学期は 2016～2018、秋学期は 2015～2017 の数字）で極端に下がった科目はない。 ※なお、履修者数が 20 名未満の場合は、「S+A で 30%程度」の制限はない。

| 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 | 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 文学研究法入門Ⅰ | 2015 | 77.8% | 45 | 社会福祉入門 | 2016 | 64.7% | 51 |
| | 2016 | 67.6% | 34 | | 2017 | 74.5% | 55 |
| | 2017 | 100.0% | 5 | | 2018 | 86.4% | 59 |
| 英米文学概論Ⅰ | 2016 | 87.1% | 163 | 日本語学概論Ⅰ | 2016 | 76.7% | 43 |
| | 2017 | 83.9% | 193 | | 2017 | 83.3% | 36 |
| | 2018 | 87.1% | 140 | | 2018 | 78.8% | 33 |
| 社会学概論 | 2015 | 62.5% | 72 | 東洋文化史Ⅰ | 2016 | 88.9% | 9 |
| | 2016 | 39.5% | 38 | | 2017 | 47.7% | 44 |
| | 2017 | 76.7% | 60 | | 2018 | 52.3% | 44 |
| 歴史学概論 | 2015 | 81.0% | 42 | | | | |
| | 2016 | 51.9% | 52 | | | | |
| | 2017 | 73.3% | 30 | | | | |

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》（資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「歴史学概論」

①履修者の成績の推移と教授法の関係について

S＋A 評価の動向をみると2015年度・12%、2016年度・15%、2017年度・33%と推移しており、一定の傾向を指摘できる。これは、評価の半分を占めるレポートの質の向上を示している。授業の中で、歴史叙述とは何かを論じながら、根拠の明示、すなわち学術文書における「注」の重要性を強調して、その説明に時間を割くように努めた。なおかつ課題提示の際、評価の基準としての注の重要性を強調することによって、学生たちのレポートの取り組みの意識を改善できたと考える。

②授業アンケートから見る学生の学修目標到達度

「授業の到達目標達成度」の科目平均は、以下のように推移した。2015 年度・2.81、2016 年度・3.32、2017年度・3.75。この推移からは、上記①の授業改善への取り組みが、学生にも反映されたと考えられる。

〇アセスメント指標２：教員採用試験（社会・地歴・公民）の合格者数

社会・地歴・公民の教員採用試験は難関であり、人間と社会と文化に関する幅広い基礎的教養と深い専門性が求められる。この試験の合格者数はアセスメント項目（１）の点検に資すると考え、アセスメント指標とした。

まず、毎年の途中取り消しを除いた４年次段階の文学部教職課程登録数は 30～40 名程度で、教採受験者数は約 20 名、現役合格数は８～９名である。過去３年（2016 年度、2017 年度、2018 年度）の合格者数は英語、国語、社会（または地歴・公民）を合わせると、16 名（現役９、卒業生７）→17 名（現８、卒９）→22 名（現９、卒 13）と増加している。教員採用は地方を中心に臨時教員経験者を合格させる傾向にあるが、文学部も毎年、ほぼ半数が卒業生である。そのうち、社会（または地歴・公民）は２名（現役２）→1 名（卒１）→5 名（現２、卒３）となっている。

学部の取組としては、４年前から教職志望者のための大会を年２回開催し、現役教員をしている本学部卒業生を招いて教育現場の仕事やアドバイス、教採合格者の体験報告や懇談、教職キャリアセンター職員によるアドバイスを行なうなどして志望者をサポートしている。

**②アセスメント項目（2）**

**＜母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる。＞**

〇アセスメント指標１：語学系履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）とした4科目では、B 評価以上の達成率はおよそ8割であり、十分な教育がなされているものと考える。年を追って下がる傾向や上がる傾向は見られず安定している。なお、Oral Communication Ⅰの B 以上評価が9割に近いのは、3クラスに分けて少人数教育を行い、教育効果が出ているためと考えられる。過去 3 年間（春学期は 2016～2018、秋学期は 2015～2017 の数字）で明らかに下がったと思われる「日本語教育概論Ⅰ」については、履修者数が倍以上となったためかと思われるが、履修者の増減にかかわらず十分な教育がなされることが望ましい。しかし、B 評価以上が6．5割を超えているので、教育に特段の問題があったとは考えにくい。

| 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 | 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| Oral Communication Ⅰ | 2016 | 89.2% | 111 | 中国社会文化論Ⅰ | 2016 | 75.8% | 33 |
| | 2017 | 86.9% | 99 | | 2017 | 77.3% | 44 |
| | 2018 | 93.0% | 100 | | 2018 | 76.5% | 34 |

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日本語教育概論Ⅰ | 2016 | 71.4% | 28 | Academic Writing Ⅰ | 2016 | 79.0% | 81 |
| | 2017 | 85.0% | 20 | | 2017 | 87.3% | 71 |
| | 2018 | 66.7% | 51 | | 2018 | 77.3% | 66 |

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》（資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より）

「Academic Writing Ⅰ」

・本科目は複数クラス開講されており、表の数値は全体のものであるが、以下のコメントは特定の教員のものである。

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

B 評価は、2016 年度は、52%、2017 年度は、42%、2018 年度は、21%のように、減っている。その分、A 評価が増えている。大きな理由として、履修者数が、20 名を超えるか否かによる。この科目は、授業の特性から、定員を 20 名程度として、初回授業で選抜している。例年、授業に真面目に取り組む学生が多くいる。2016 年度は、定員の 20 名を超えていたため、キャップ制に従ったため、B が多くなっている。2017、2018 年度は、履修者数が 20 名以下であったためと、多くの学生の授業への取り組みと成果がよく、A 評価が増加している。

②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）

到達目標の達成度が年度の推移によって上がっている。これは、シラバスに到達目標を明記するとともに、初回授業などで説明することにより、履修者に到達目標を認識してもらい、自身の達成度を考えてもらう機会を授業内に設けたためではないかと思う。

**〇アセスメント指標２：教員採用試験（英語・国語）の合格者数**

文学部全体の合格者数の推移は前のアセスメント項目（１）で示した通りで、過去 3 年（2016 年度、2017 年度、2018 年度）においては、16 名（現役９、卒業生７）→17 名（現８、卒９）→22 名（現９、卒 13）と増加している。ここにも先に触れた学部の教職生大会の効果が出ているものと考える。そのうち、英語は 7 名（現役３、卒業生４）→11 名（現５、卒６）→９名（現８、卒１）となっている。また国語の合格者数は過去 3 年において、7 名（現役４、卒業生３）→4 名（現１、卒３）→６名（現１、卒５）となっている。

**〇アセスメント指標３：TOEIC 等のスコア**

文学部生の英語力が入学時からどのくらい上昇したのかについて、2016 年度と 2017 年度の TOEIC スコアのデータをもとに点検する。用いるデータは、学年、入学時スコア（以下、初回点）、在学時の最高点（以下、最高点）のみである。本来は、留学先、留学期間、出身高校の偏差値、GPA スコア、メジャー、教職課程の履修有無、日本学生支援機構の奨学金貸与の有無・種別・貸与総額のほか、本学の独自性の指標であるクラブ・サークル活動の諸データを加味する必要があるが、今回は上述のデータに限定した。（TOEIC スコアに関する資料より）

１．単純集計

1-1. 2016 年度

**表 1：2016 年度全体（606 名）**

| | 初回点 | 最高点 | 上昇点 | 受験回数 |
|---|---|---|---|---|

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 平均値 | 398.70 | 520.98 | 122.28 | 3.95 |
| 中央値 | 375.00 | 485.00 | 110.00 | 3.00 |
| 標準偏差 | 127.377 | 178.467 | 51.09 | 2.853 |

**表 2：2016 年度 4 年生（413 名）**

| | 初回点 | 最高点 | 上昇点 | 受験回数 |
|---|---|---|---|---|
| 平均値 | 394.07 | 503.93 | 109.87 | 3.59 |
| 中央値 | 370.00 | 475.00 | 105.00 | 3.00 |
| 標準偏差 | 122.440 | 167.560 | 45.12 | 2.408 |

**表 3：2016 年度 5 年生（193 名）**

| | 初回点 | 最高点 | 上昇点 | 受験回数 |
|---|---|---|---|---|
| 平均値 | 408.63 | 557.46 | 148.83 | 4.72 |
| 中央値 | 395.00 | 525.00 | 130.00 | 3.00 |
| 標準偏差 | 137.152 | 195.327 | 58.17 | 3.511 |

表 1～3 は、2016 年度における全体（表 1)、4 年生（表 2)、5 年生（表 3）の TOEIC の初回点、最高点、上昇点の平均値と受験回数を示したものである。表 1 をみると、文学部生全体の TOEIC 平均スコアは初回点 398.70 点、最高点 520.98 点で 122.28 点の上昇となっている。これを中央値でみると、初回点 375 点、最高点 485 点と平均値をそれぞれ 23.7 点と 35.98 点下回っており、少数の高得点者が全体の平均値を底上げしていることがわかる。標準偏差は、初回点が 127.377、最高点が 178.467 であった。また、受験回数の平均は 3.95 回となっている。

次に、4 年生に限定した結果をみてみよう。表 2 に示したように、文学部 4 年生の TOEIC 平均スコアは初回点 394.07 点、最高点 503.93 点で 109.87 点の上昇となっている。これを中央値でみると、初回点 370 点、最高点 475 点と平均値をそれぞれ 24.07 点と 28.93 点下回っており、やはり少数の高得点者が全体の平均値を底上げしていることがわかる。標準偏差は、初回点が 122.440、最高点が 167.560 であった。また、受験回数の平均は 3.59 回となっている。

続いて、5 年生に限定した結果をみてみよう。表 3 に示したように、文学部 5 年生の TOEIC 平均スコアは初回点 408.63 点、最高点 557.46 点で 148.83 点の上昇を達成した。これを 4 年生と比べると、初回点で 14.56 点、最高点で 53.53 点、上昇点で 38.96 点高い数値になっている。また、標準偏差は、4 年生と比べると初回点で 14.712 点、最高点で 27.767 点高い。今回の分析データに、GPA スコア、個人の留学経験の有無・時期など変数がないため、推論の域をでないが、5 年生のデータは、留学経験のない層、または、GPA スコア下位層を相殺したとしても、中期・長期の留学を経験した学生層の得点上昇が、全体のスコアを押し上げていることを示している。

ただし、受験回数の平均は 4.72 回と、4 年生にくらべてわずかに 1.13 回多いだけである。4 年生よりも少なくとも 1 セメスター以上在籍期間が長い 5 年生としては、受験回数が少ないといわざるを得ない。グローバル企業や有名企業の就職をめざす学生には、就職活動が本格化する前に TOEIC を受験するように周知する必要がある。

以上の結果から、中期・長期留学を経験した学生がふくまれると想定される 5 年生のスコアが、4 年生のスコアを相殺し、学部全体を底上げしていると判断できる。注目すべきは、5 年生のスコア達成の差である。上昇点の標準偏差は 4 年生で 45.12 であるのに対して、5 年生は 58.17 で

ある。また、最高点の標準偏差は 4 年生が 167.560 であるのに対して、5 年生は 195.327 となっている。これは、中期・長期の留学がスコアに良い影響を与えているものの、個人によってスコア達成に大きな差が生じていることを示すものである。

今後は、留学先、プログラム、現地での学習時間―など、留学成果の内実について総合的に評価する機会やシステムが必要と考える。2019 年度から、本学で留学成果を測るアプリケーションが導入されるが、量的な指標だけでなく質的な指標も加味した分析が、本学の独自性や学生の傾向性からみても重要となる。

1-2. 2017 年度

表 4～6 は、2017 年度における全体（表 4)、4 年生（表 5)、5 年生（表 6）の TOEIC の初回点、最高点、上昇点の平均値と受験回数を集計したものである。表 4 をみると、文学部生全体の TOEIC 平均スコアは初回点 373.94 点、最高点 487.18 点で 113.58 点の上昇となっている。2016 年度と比べると初回点で 24.76 点、最高点で 33.46 点、上昇点で 8.7 点低下した。

責任を回避するわけではないが、このスコア低下は、大学や学部の英語教育力の問題だけに単純に還元できない。河合塾が公表しているセンターリサーチの自己採点結果から明らかなように、本学文学部は他学部と同じように、センター試験の英語得点が年々低下している。センター試験の英語スコアと TOEIC スコアには強い相関があることは周知の事実である。受験生の減少傾向が続く以上、今後も英語力の低い新入生が入学することを見据えて、本学の受験層に合致した対策が必要になるだろう。（TOEIC スコアに関する資料より）

表 4：2017 年度全体（623 名）

| | 初回点 | 最高点 | 上昇点 | 受験回数 |
|---|---|---|---|---|
| 平均値 | 373.94 | 487.52 | 113.58 | 3.46 |
| 中央値 | 350.00 | 450.00 | 100.00 | 3.00 |
| 標準偏差 | 141.128 | 192.240 | 51.11 | 2.528 |

表 5：2017 年度 4 年生（445 名）

| | 初回点 | 最高点 | 上昇点 | 受験回数 |
|---|---|---|---|---|
| 平均値 | 367.37 | 463.18 | 95.81 | 3.07 |
| 中央値 | 340.00 | 425.00 | 85.00 | 2.00 |
| 標準偏差 | 139.588 | 180.005 | 40.42 | 2.175 |

表 6：2017 年度 5 年生（178 名）

| | 初回点 | 最高点 | 上昇点 | 受験回数 |
|---|---|---|---|---|
| 平均値 | 390.37 | 548.37 | 158.01 | 4.43 |
| 中央値 | 372.50 | 522.50 | 150.00 | 4.00 |
| 標準偏差 | 143.996 | 208.269 | 64.27 | 3.045 |

2017 年度全体の初回点、最高点の中央値は、初回点 350 点、最高点 450 点と平均値をそれぞれ 28.94 点と 37.18 点下回っており、少数の高得点者が全体の平均値を底上げしている状況は 2016 年度と同じである。受験回数の平均は 3.46 回と 2016 年度から 0.46 回低下した。学生に TOEIC 受験の動機付けをいかに与えていくかが重要であることはいうまでもないが、あくまでも今日の学生の実態にあった現実的かつ説得的な対策が求められる。

次に、4 年生に限定した結果をみると、表 5 に示したように、文学部 4 年生の TOEIC 平均スコ

アは初回点 367.37 点、最高点 463.18 点で 95.81 点の上昇となっている。2016 年度と比べると、初回点は 26.7 点、最高点で 40.75 点、上昇点で 14.06 点の低下となった。これは既述の全体の傾向と同じである。中央値でみると、2017 年度は、初回点 340 点、最高点 425 点と平均値をそれぞれ 17.87 点と 38.18 点下回っている。2016 年度と比べると、初回点は差が縮まったが、最高点ではさらに差が開く結果となった。以上から、やはり少数の高得点者が、全体の最高点の平均値を底上げしていることがわかる。

続いて、5 年生に限定した結果をみると、表 6 に示したように、文学部 5 年生の TOEIC 平均スコアは初回点 390.37 点、最高点 548.37 点で 158.01 点の上昇と、4 年生と比べていずれも大きな数値になっている。受験回数の平均は 4.43 回と、4 年生にくらべてわずかに 1.36 回多い。2016 年度と同じく、4 年生よりも少なくとも 1 セメスター以上在籍期間が長い 5 年生としては、やはり受験回数が少ないといわざるを得ない。

ここで注目すべきは、5 年生の上昇点である。2016 年度の 5 年生と比べると、2017 年度の 5 年生は初回点、最高点ともに下回ったが、上昇点だけは上回った。また、2016 年度の 5 年生と比べると、2017 年度の 5 年生は、標準偏差で初回点、最高点、上昇点いずれも高い値を示している。

データに限りがあるので推論の余地をでないが、2017 年度は全体のスコアは初回点、最高点、上昇点いずれも 2016 年度より低下したが、標準偏差の値からみれば、5 年生のなかの上位層の成果が、スコアの全体の減少をこの程度に抑えている可能性が高いとみてよい。

## 2. 日本の大学生との比較

### 2-1. 平均スコア

日本の大学生の TOEIC-IP 平均スコアは、TOEIC® Program DATA&ANALYSIS 2017（以下、「TOEIC 発表データ」）によれば 2016 年度の 444 点であった。これを文学部生全体の最高点と比較すると、2016 年度で 76.98 点、2017 年度では 43.52 点上回っている。しかし、4 年生の全国平均スコアは 513 点であり、これを文学部生全体と比べると、2016 年度では 7.98 点上回ったものの、2017 年度は 25.48 点下回った。これを 5 年生に限定してみると、2016 年度は 44.46 点、2017 年度は 35.37 点、全国の大学 4 年生の平均を上回っている。あらためて、中期・長期留学の成果が TOEIC スコアの上昇に効果的であるかがうかがえる。

### 2-2. 教育力―学生のスコア上昇

大学の英語教育力をどう測定するかは難しいが、今回の TOEIC のデータでいえば、初回点と最高点の差異、すなわち上昇点が問われることはまちがいない。「TOEIC 発表データ」によれば、2016 年度の日本の大学生全体の TOEIC-IP の平均点は 1 年生が 430 点、4 年生が 513 点であった。同データは、同じ受験生の経年変化をあつかっていないので、1 年生と 4 年生の平均の差異は大学生のスコア上昇点ではない。しかし、ここでは、文学部生のデータと比較するため、便宜的に前者を文学部の初回点、後者を同じく最高点とする。

文学部と比較すると、日本の大学生の全国平均は入学時から在学時までで 83 点の上昇にとどまっている。これに対して、文学部は 2016 年度では 122 点上昇で 39 点、2017 年度は 114 点上昇で 31 点、全国の大学平均を上回っている。特筆すべきは、2016 年度の文学部生の上昇点である。同年度の文学部生の初回点は 398.70 点で、大学 1 年生の全国平均 433 点を 34.3 点下回っていたにもかかわらず、4 年生の全国平均 513 点を 7.98 点上回った。これは、文学部の英語教育力と、文学部生の努力の成果を如実に示しているといってよい。

また、2017 年度では、4 年生の全国平均は 25.48 点下回ったものの、初回点 373.94 点から最高点 487.52 点と 113.58 点上昇しており、2016 年度の上昇点と遜色ない結果となっている。2017 年

度の初回点が 373.94 点と、大学 1 年生の全国平均 433 点から 59.06 点下回りながらも、全国の大学生平均のスコアを上回った。このことからみれば、相対的に英語力の低い学生が増加する中で、同年度も学部の英語教育に一定の成果があったとみてよい。2017 年度に、4 年生の全国平均を下回ったことについては対策が必要だが、両年度のスコアの上昇点から考えると、大学全体のみならず、文学部の英語教育が学生の TOEIC スコアに一定の効果をもたらしているといえる。

なお、両年度の標準偏差は、2016 年度が初回点 127、最高点 178、2017 年度は初回点 141、最高点 192 点といずれも拡大している。TOEIC の取得スコアについていえば、入学時だけでなく卒業時においても学部生間の英語能力の格差が開いてきているといえる。SGU を持続可能なものにするためにも、上位層、中位層、下位層の能力・資質・動機づけに即した英語教育の体制構築が求められる。

**③アセスメント項目(3)**

**＜基礎的・専門的学知に基づいて、新しい知識と表現を創造することができる。＞**

**〇アセスメント指標１：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度**

対応科目（パイロット）とした５科目では、B 評価以上の達成率はおよそ６．５割であり、さらなる改善が求められる。ただし、達成率の低さは「日本文学概論Ⅰ」「日本文学史」の達成率の低さ（特に、2015 年度前教員担当時）による側面があり、現教員のもとでは改善が見られるので、今後はさらなる改善が見込めると考える。また、過去 3 年間（春学期は 2016～2018、秋学期は 2015～2017 の数字）で極端に下がった科目はない。

| 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 | 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 日本文学概論Ⅰ | 2015 | 26.0% | 50 | 日本文学史 | 2015 | 54.2% | 48 |
| | 2016 | 49.1% | 53 | | 2016 | 67.7% | 31 |
| | 2017 | 55.0% | 60 | | 2017 | 68.5% | 54 |
| 英語学概論Ⅰ | 2016 | 67.9% | 137 | 社会福祉概論Ⅰ | 2016 | 65.8% | 38 |
| | 2017 | 65.3% | 144 | | 2017 | 58.1% | 43 |
| | 2018 | 82.5% | 114 | | 2018 | 75.0% | 32 |
| 演劇論 | 2015 | 82.2% | 118 | | | | |
| | 2016 | 84.5% | 148 | | | | |
| | 2017 | 81.0% | 179 | | | | |

（成績に関する教務部資料より作成）

**《科目の自己点検評価の例》**（資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より）

**「日本文学概論Ⅰ」**

①B 評価の増減に関するコメント・授業改善への取り組み・問題点等

赴任が 2016 年度からのため、2016 年度、2017 年度の２年間の結果について検討した。過去２年間で B 評価の増減はない。2016 年度に「もうすこし、皆でやるのがあったらもっと良いのでしょうか…」（原文ママ）とのコメントがあったため、2017 年度はグループで課題を検討する時間を多く設けるなどの工夫をした。能動的に考える時間が増えたためか、「今まで考えたことのないこと

を深めることができた」などの前向きなコメントが多くなった。
②授業の到達目標の達成度の推移に関するコメント（授業改善との関係など）
赴任が 2016 年度からのため、2016 年度、2017 年度の２年間の結果について検討した。2016 年度の反省として､学生の授業内容の把握度合いを見極めきれていなかったことがあった｡そのため、2017 年度は授業のたびに書き込み式のプリントを作成し、毎回それを提出してもらうことにした。それを見ることで、学生が興味を持ったトピックや、聞き漏らしてしまっている箇所などを知ることができ、足りないと感じた部分は翌週に補足するなどした。また、プリントに簡単なコメントを付けて返すことで、学生からは「文通しているみたいで楽しかった」とのコメントももらえた。前年に比べ、学生自ら考えるという姿勢が多くみられたように感じた。

**④アセスメント項目(4)**
**＜論理的に思考し、適切な方法で情報の取得と処理を行い、物事の的確な判断ができる。＞**
○アセスメント指標１：語学系履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度
対応科目（パイロット）における B 評価以上の達成率とその推移は科目ごとで異なるが、およそ 5～6 割りで推移しており、さらなる改善が求められる。B レベルに到達できない理由（履修者の学力差など）をよく検討し、達成度の向上をはかりたい。

| 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 | 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ジャーナリズムの社会学 Ⅰ | 2016 | 52% | 27 | 社会調査の基礎 | 2016 | 62% | 72 |
| | 2017 | 63% | 24 | | 2017 | 43% | 37 |
| | 2018 | 55% | 22 | | 2018 | 76% | 61 |
| メディアと社会心理 Ⅰ | 2016 | 63% | 98 | | | | |
| | 2017 | 61% | 115 | | | | |
| | 2018 | 67% | 144 | | | | |

（成績に関する教務部資料より作成）

**《科目の自己点検評価の例》**（資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より）
**「社会調査の基礎」**
**①履修者の成績の推移と教授法の関係について**
B 評価の割合は、2016 年に 19.8%、2017 年に 29.7%、2018 年に 21.7%となっている。年度による増減は、クラブなどでまとまって履修する学生が多い時は C・D 評価の割合が多くなったためである。S 評価と A 評価とを合わせた割合はキャップ制の上限内に収まっているが、2016 年度に 23%、2017 年に 26%、2018 年に 30%と増加しており、B 評価と合わせた割合は、増加傾向にあると思われる。授業内容を厳選、整理して、履修者が理解しやすい内容へ改善していることが反映されていると思われる。
**②授業アンケートから見る学生の学修目標到達度**
授業の到達目標の達成度は、平均で 2015 年度が 2.44、2017 年度が 2.74、2018 年度が 2.85 と徐々に改善されている。最頻値をみると、2015 年度が「2」、2017 年度が「3」、2018 年度が「4」である。履修者の理解レベルに応じた授業内容の見直しも必要だが、授業内容については２つの制約を受けている。ひとつは本科目が「社会福祉士」国家試験の指定科目であるため、国家試験の出

題範囲と出題レベルに対応した授業をする必要があること。もうひとつは、同時に本科目が社会調査協会による「社会調査士」認定の科目であり、授業内容について毎年認定を受けていることである。したがって、履修者には科目の意義を十分に理解させて、必要とされる学修レベルに到達するよう指導していくことに努めたい。

⑤アセスメント項目(5)

＜文化の多様性を尊重しつつ、世界市民として、生命の尊厳と平和を志向する。＞

〇アセスメント指標１：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度

対応科目（パイロット）におけるＢ評価以上の達成率は平均して７割を超えており、概ね適切な教育と適正な評価がされていると考えられる。

| 科目名 | 年度 | Ｂ以上 | 履修者数 | 科目名 | 年度 | Ｂ以上 | 履修者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 比較文化Ⅰ | 2015 | 97.0% | 120 | 東欧の歴史と文化 | 2015 | 86.0% | 57 |
| | 2016 | 87.0% | 141 | | 2016 | 84.0% | 98 |
| | 2017 | 94.0% | 186 | | 2017 | 88.0% | 58 |
| 倫理学概論Ⅰ | 2016 | 44.0% | 23 | 比較文化史概論 | 2016 | 86.0% | 158 |
| | 2017 | 73.0% | 45 | | 2017 | 0.0% | 0 |
| | 2018 | 62.0% | 42 | | 2018 | 83.0% | 223 |
| 国際社会論 | 2015 | 72.0% | 18 | | | | |
| | 2016 | 92.0% | 12 | | | | |
| | 2017 | 71.0% | 24 | | | | |

（成績に関する教務部資料より作成）

《科目の自己点検評価の例》（「担当科目自己点検のためのコメント」より）

**「倫理学概論Ⅰ」**

①履修者の成績の推移と教授法の関係について

2015 年度から 2017 年度のＢ評価を受けた履修者の割合は 22%→36%→31%と推移しているが、全体で見ると相対的にＣが減りＡ以上が増えていることを勘案すると、履修者の成績は上昇傾向にあるといえる。PASS の授業観察等による第三者の助言を取り入れつつ、ディスカッションで多様な意見を取り上げることと授業内容の理解とが両立するように努めてきたことが反映されていると思われる。

②授業アンケートから見る学生の学修目標到達度

達成度について、「70～79%」を選択した割合が 43%→33%→49%、4「80～89%」を選択した割合が 40%→49%→11%、5「90%以上」を選択した割合が3%→10%→16%であり、全体的に見ると、達成度は上昇しているが、授業内容の理解が十分といえる層と、十分とはいえない層との間の開きが出てきている可能性があり、授業内容の理解度をはかるための履修者のアウトプットという点から課題の提示方法を改善していきたい。

**「比較文化史概論」**

①履修者の成績の推移と教授法の関係について

Ｂ評価以上は 2016 年度に 86%、2018 年度で 83%であり、現行のシラバスで履修者の 8 割超に一定程度の理解をさせることができたといえるが、2018 年度には 10%の履修者がＣ評価となっていることを踏まえ、履修者の学力レベルの差を考慮して課題の提示などを工夫したい。

②授業アンケートから見る学生の学修目標到達度

2017 年度不開講のため達成度の増減傾向をいうことはできないが、学生の到達度と成績評価との相関に留意していきたい。

〇アセスメント指標２ ： 海外研修参加者・留学学生へのアンケート（研修終了後、留学からの復学時）

今回は、バッキンガム大学語学研修（8 月に 3 週間）参加者とバッキンガム大学英語 DD（1.5 年）生へのアンケート結果を点検する。前者は過去 3 年間のデータを、後者は留学期間 2 年が 1.5 年になってからの過去 2 年間のデータを見る。　まず語学研修参加者であるが、以下の 2016 年度アンケート結果がある。

異文化理解アンケート結果

| | 研修参加者 | | | 研修不参加者 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | n=6 | n=9 | | n=38 | n=12 | |
| カテゴリー | 5 月 | 8 月 | 増減 | 5 月 | 9 月 | 増減 |
| 1.　打たれ強さ・前向きさ | 3.74 | 3.94 | +0.20 | 3.68 | 3.79 | +0.11 |
| 2.　柔軟さ・寛容さ | 4.16 | 4.18 | +0.02 | 3.90 | 4.08 | +0.18 |
| 3.　認識力 | 4.50 | 4.40 | -0.10 | 4.19 | 4.27 | +0.08 |
| 4.　自律能力 | 4.32 | 4.42 | +0.10 | 4.18 | 4.67 | +0.49 |
| 5.　総合 | 4.10 | 4.16 | +0.06 | 3.95 | 4.13 | +0.18 |

（注）カテゴリーの内容は次の通りである。

1.　打たれ強さ・前向きさ：私はどの地にあっても、そこでの生活に対処する能力に自信がある。
2.　柔軟さ・寛容さ：私はいろいろなタイプの人と関わりを楽しむことができる。
3.　認識力：私とは違う人といる時、私はその人の文化を考慮してその人を理解する。
4.　自律能力：私は見知らぬ環境でも始めたことを成し遂げられると信じる。

項目数は全部で 50。「全く当てはまらない」から、「非常に当てはまる」までの 6 件法。異文化適応能力、世界市民としての資質を測ることができると考える。なお、異文化適応能力アンケート（6 件法）を研修参加者については 5 月と研修終了時、研修には参加はしなかったが、研修先と似た授業科目を履修した学生には 5 月と 9 月の 2 回回答をしてもらった。2 者のアンケート結果を比べることで、研修の効果を見ようとするものである。

まず、研修参加者の 2 回の回答の数値が、研修不参加者の数値よりも高い傾向にある。元々異文化理解について意識の高い学生が参加しているからともいえる。次に、カテゴリー 1 以外では、非参加者の方が伸びている印象がある。最初から異文化適応能力の高い参加者が、さらに異文化能力を高めるには、3 週間の研修では短いのかもしれない。今後は、異文化や異文化理解に関心の高い参加者がよりいっそう興味を深め、異文化適応能力を高めていけるよう研修の質を上げたい。（授業や小旅行が続く多忙な研修であり、学生は疲れ気味であった。次回からは、文化や homestay を堪能できる、ゆったりとしたものにしたい。また、現地での Cultural Studies という授業と Homestay の満足度（５件法）について参加者に問うたところ、Cultural Studies 4.29、Homestay 4.43 であった。異文化に対する学生の受容度（＝成長度）が伺われる。

なお、語学力の面では出発前と帰国後に語学試験を行い、次の結果が出ている。

事前事後 CASEC 結果

| | CASEC（1000 点満点） | | TOEIC（990 点満点） | |
|---|---|---|---|---|
| | 研修前 | 研修後 | 研修前 | 研修後 |
| 最高 | 703 | 789 | 740 | 865 |
| 最低 | 392 | 311 | 270 | 250 |
| 平均 | 539 | 575 (+36) | 486 | 532 (+46) |

注：n=9, 受験期間：研修前 5/1-6/30、研修後 8/25-9/23、TOEIC のスコアは CASEC のスコアを換算したもの。

事前事後の測定において、CASEC、及び TOEIC のスコアの上昇が見られ、研修が参加者の語学力向上に役立ったことがわかる。

次に 2017 年度の語学研修アンケート結果を点検する。

異文化理解アンケート結果

| | 研修参加者 | | | 研修不参加者 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | n=14 | n=14 | | n=26 | n=26 | |
| カテゴリー | 5 月 | 9 月 | 増減 | 5,7 月 | 9 月 | 増減 |
| 1. 打たれ強さ・前向きさ | 3.70 | 4.15 | +0.45 | 3.56 | 3.70 | +0.14 |
| 2. 柔軟さ・寛容さ | 4.15 | 4.53 | +0.38 | 3.99 | 3.98 | -0.01 |
| 3. 認識力 | 4.22 | 4.44 | +0.22 | 4.20 | 4.13 | -0.07 |
| 4. 自律能力 | 4.40 | 4.59 | +0.19 | 4.25 | 4.18 | -0.07 |
| 5. 総合 | 4.12 | 4.43 | +0.31 | 4.00 | 4.00 | 0 |

まず、どの項目も研修参加者の方が研修非参加者に比べ、研修前の値が高い。次に、研修の前後で、研修参加者はどの項目においても値が高くなっているが、研修非参加者は値がほぼ同じで総合では変化がない。また、研修に参加した学生は異文化適応能力や、異文化理解に対する動機付けが元から高い。さらに研修を経る（昨年と比べ、週末 host family と過ごせるような、ゆったりとしたものに変えた）とその値が増加する傾向が著しい。

さらに、現地の Culture and Language という授業と Homestay の満足度についてアンケート（５件法）をとったところ、Culture and Language 4.86、Homestay 4.86 であった。満足度が高い研修であったといえる。

事前事後 CASEC 結果

| | CASEC（1000 点満点） | | TOEIC（990 点満点） | |
|---|---|---|---|---|
| | 研修前 | 研修後 | 研修前 | 研修後 |
| 最高 | 751 | 691 | 810 | 710 |
| 最低 | 447 | 505 | 350 | 410 |
| 平均 | 608 | 610 (+2) | 569 | 570 (+1) |

注：n=14, 受験期間：研修前 5 月～6 月, 研修後 9 月, TOEIC のスコアは CASEC のスコアを換算したもの。

事前事後の測定において、CASEC、及び TOEIC のスコアの上昇がほとんど見られなかった。研修前の得点は昨年に比べ約 70 点も高かったが（CASEC スコア）、研修後 CASEC の得点に現れるような能力の伸びは認められなかった。TOEIC に換算しても同じである。

次に 2018 年度について点検する。

異文化理解アンケート結果

| | 研修参加者 | | | 研修不参加者 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | n=14 | n=14 | | n=26 | n=26 | |
| カテゴリー | 5 月 | 8 月 | 増減 | 6 月 | 9 月 | 増減 |
| 1. 打たれ強さ・前向きさ | 3.6 | 4.2 | +0.8 | 3.7 | 4.0 | +0.3 |
| 2. 柔軟さ・寛容さ | 4.1 | 4. 3 | +0.2 | 4.0 | 4.1 | +0.1 |
| 3. 認識力 | 4.1 | 4.5 | +0.4 | 4.3 | 4.3 | 0 |
| 4. 自律能力 | 4.1 | 4.5 | +0.4 | 4. 5 | 4. 8 | 0 |
| 5. 総合 | 4.0 | 4.4 | +0.4 | 4.1 | 4.2 | +0.1 |

まず、研修非参加者の方が研修参加者に比べ、研修前の値が高い。次に、研修の前後で、研修参加者はどの項目においても値が高くなっているが、研修非参加者は値がほぼ同じで総合ではほとんど変化がない。また、現地の British Customs and Culture という授業と Homestay の満足度についてアンケート（５件法）をとったところ、British Customs and Culture 4.5、Homestay 4.2 であった。満足のいく研修であったといえる。語学力については、研修前後に（CASEC が無くなったので）TOEIC を受験するようにした。結果は次の通りで、平均で 27.1 点の伸びが見られた。

事前事後 TOEIC 結果

| | TOEIC（990 点満点） | |
|---|---|---|
| | 研修前 | 研修後 |
| 最高 | 580 | 590 |
| 最低 | 250 | 240 |
| 平均 | 410.9 | 438 (+27.1) |

次に、英語 DD 生について、異文化適応能力を点検する。2016 年 7 月～2018 年 1 月（DD4 期）と 2017 年 7 月～2019 年 1 月（DD5 期）の 2 つのグループに対するアンケート結果を見る。まず、以下は英語 DD4 期生のアンケート結果である。

異文化適応能力アンケート　(n=7)

| 回答年月日 | 打たれ強さ 前向きさ (ER) | 柔軟さ 寛容さ (FO) | 認識力 (PAC) | 自律能力 (PA) | 総合 |
|---|---|---|---|---|---|
| June 2016 | 3.6 | 3.8 | 4.4 | 4.1 | 4.0 |
| January 2018 | 4.5 | 4.5 | 4.6 | 5.1 | 4.6 |
| 増減 | +0.9 | +0.7 | +0.2 | +1.00 | +0.6 |

（注）適応能力を示すカテゴリーは語学研修の場合と同じである。各能力の説明は省く。

まず、どの値も留学を経て増加している。異文化適応能力が高まったと言えるであろう。認識力の伸びが少ないが、元が高いので更に伸ばすのは難しかったと考える。語学力については次の通りである。大きく伸びている。

事前事後 TOEIC 結果

| | TOEIC（990 点満点） | |
|---|---|---|
| | 研修前（n=7) | 研修後(n=6) |
| 最高 | 820 | 890 |
| 最低 | 550 | 725 |
| 平均 | 624.3 | 794.2 (+169.9) |

参加者からは、感想として「自分がどんな人間なのか、自分の強みや進路を発見できた」「コミュニケーション力､社交性が大きく伸びた」｢イギリスの社会問題を学び､生活で感じ取ることができ、世界に目を向けること、日本について考えるきっかけができた」「文化の違いを目の当たりにし、動じなくなった。違うことが当たり前であり、違うことを正しい、間違っているではなく、ひとつの意見として受け入れられるようになった」「人の意見や目を気にせずに自分の考えを伝えられるようになった」「大人数の住む寮で、友達とうまく関わりながら料理や掃除、健康管理もできるようになり、将来への大きな自信となった」「異文化、言葉の壁を感じ、理解し合うことなどできないと感じたこともあったが、結局は国籍や国民性ではなく、個人同士の関係だと気づいた」等が寄せられた。

次に英語 DD５期生のアンケート結果は次の通りである。

異文化適応能力アンケート

| 回答年月日 | 打たれ強さ<br>前向きさ<br>(ER) | 柔軟さ<br>寛容さ<br>(FO) | 認識力<br>(PAC) | 自律能力<br>(PA) | 総合 |
|---|---|---|---|---|---|
| June<br>2017 | 4.0 | 4.1 | 4.2 | 4.4 | 4.2 |
| January<br>2019 | 4.6 | 4.7 | 4.8 | 4.8 | 4.7 |
| 増減 | +0.6 | +0.6 | +0.6 | +0.4 | +0.5 |

どの値も留学を経て増加している。異文化適応能力が高まったと言える。語学力も次の通り。大きく伸びている。

事前事後 TOEIC 結果

| | TOEIC（990 点満点） | |
|---|---|---|
| | 研修前 | 研修後 |
| 最高 | 740 | 895 |
| 最低 | 500 | 600 |
| 平均 | 635.7 | 791.7 (+156) |

参加者からは、感想として「(先輩が立ち上げた）Japanese Society やバドミントンサークルに所属し、活動に積極的に参加。女子一貫校で日本文化を教えるボランティアをしたり、クリスマスパレードにボランティアで参加。多くの出会いがあり、いろいろな人たちと友好関係を築いた。この友情は何よりの財産である」「孤独だと必ず行き詰まることに気づき、積極的に周囲の人と関わり､新しいコミュニティに勇気をもって入っていくことが大切とわかった」｢一人ひとりまったく違う性格を持った人と接する中で、それぞれと良好な関係を築く難しさを痛感した」「Japanese Society の副会長になり、学内で模範とされる society だと言われるほどになった。達成感があっ

た」「英語字幕つきの映画を見たり、英語の You Tube 動画を見るなど、授業以外からも多くの英国文化が吸収できた」「さまざまな国籍の友人を作り、価値観や視野を広げられたと思う。留学前と比べ、よりアクティブにオープンになった」などが寄せられた。

語学研修や留学が学生を文化の多様性を認め、他人を尊重できる、世界市民に変えていくことは間違いないといえる。

**⑥アセスメント項目(6)**

**＜学ぶことの意味を理解し、自律的学修者として、目標をもって自己の成長を図る。＞**

**〇アセスメント指標１:初年次セミナーの到達度（学び始めルーブリック・リフレクションシート）**

**〇アセスメント指標２:文学部の学びとライフデザインの到達度（アンケート）**

アセスメント指標は上記のとおりであるが、指標 1 については、学部全体の資料が入手できず、後者は 2019 年度開講であるため、今回は分析ができなかった。次回から分析を行う。

**⑦アセスメント項目(7)**

**＜人間主義の社会に向かって、他者と協力する姿勢やリーダーシップを発揮する。＞**

**〇アセスメント指標１：履修科目の成績と授業アンケートの「到達目標」の達成度**

対応科目（パイロット）における B 評価以上の達成率は 7 割を超え、概ね適切な教育と適正な評価が行なわれているといえる。100%のケースもあるが、これは履修者数が 20 名を下回る科目で特に教育効果があったためと考えられる。

| 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 | 科目名 | 年度 | B 以上 | 履修者数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平和学 | 2016 | 100.0% | 21 | 児童福祉論Ⅰ | 2016 | 67.0% | 54 |
| | 2017 | 74.0% | 19 | | 2017 | 39.0% | 44 |
| | 2018 | 75.0% | 4 | | 2018 | 60.0% | 48 |
| ジェンダーの社会学 | 2016 | 77.0% | 96 | 人間の安全保障 | 2016 | 100.0% | 16 |
| | 2017 | 77.0% | 117 | | 2017 | 100.0% | 28 |
| | 2018 | 73.0% | 136 | | 2018 | 95.0% | 20 |

（成績に関する教務部資料より作成）

**《科目の自己点検評価の例》（資料:「担当科目自己点検のためのコメント」より）**

**「人間の安全保障」**

①履修者の成績の推移と教授法の関係について

20 人規模のクラスのため 1-2 名の増減がパーセンテージとして大きくでている。履修者の学力は年度ごとに異なるので、授業内容もさることながら、履修者の学力レベルの違いが反映されやすい。そのため、履修者の対応力を見極めながら授業進度を調整してきたが、今後もそのように努めていきたい。

②授業アンケートから見る学生の学修目標到達度

達成度の自己評価とＢ以上の成績評価との乖離はないと思われる。履修者の状況に合わせた指導を心がけたい。

「児童福祉論Ⅰ」
①履修者の成績の推移と教授法の関係について
年度による受講者の学力の違いが成績に反映されていると思われる。毎年度、授業の最後にリアクションペーパーを提出してもらっており、それを見ながら学生の興味・関心がどこにあるのか、疑問点は何かを踏まえて、その年度の学生が興味・関心をもって受講できるように、視聴映像の選択、授業での映像の位置づけや説明の仕方を工夫している。
②授業アンケートから見る学生の学修目標到達度
年々、数値が上昇している。児童福祉は、日々動きがあるため、最新の情報を学生に紹介する必要がある。情報が更新されていなければ、そのことに学生が気づき、学習意欲が低下するおそれがある。最新の動向が紹介できるようにし、映像・新聞・データを用いて、分かりやすく、学生が興味・関心を持てるような授業を心がけている。これまでは復習に力をいれていたが、今後は無理のない範囲で予習にも取り組んでもらい、到達目標が達成できるようにしていきたい。

**〇アセスメント指標２：社会福祉士国家試験合格者数**
社会福祉専修の学生は過去 4 年間、社会福祉士国家試験に挑戦している。過去 3 年間の推移は以下の通りである。

| | 受験者数 | 合格者数 | 合格率 |
|---|---|---|---|
| 第 30 回 | 20 人 | 12 人 | 60.0% |
| 第 29 回 | 12 人 | 9 人 | 75.0% |
| 第 28 回 | 16 人 | 11 人 | 68.8% |

社会福祉士は、専門的知識及び技術をもって、身体上もしくは精神上の障害がある者、又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導、福祉サービスを提供したり、医師その他の保健医療サービスを提供する者や関係者との連絡及び調整その他の援助を行ったりする専門職である。まさに、人間主義に基づく思いやり（人間愛）と多くの専門家との協力、そしてリーダーシップを必要とする仕事であり、社会福祉士国家試験は、そのために必要とされる知識及び技能が身についたかどうかを試す試験であることから、アセスメント指標とした。
多少の増減はあるものの、この 3 年間は合格率 70%前後（全国平均は約 25%）で推移しており、全国でもトップレベルである。高い合格率は、3 年半の学習（合宿を含む）や体験実習、模擬試験を通し、上記の能力が確実に培われていることを示している。これは社会福祉士国家試験の勉強に学生が専念できる体制の構築に努めているからである。毎年 10 月～12 月に社会福祉士国家試験対策講座を実施し、国家試験科目である 19 科目すべての整理と重要ポイントの把握を、3 か月間かけて集中して行っている。また 5 月～7 月に 1～2 回の模擬試験を実施し、実力確認と本試験に向けての学習計画を立てて、早期に受験を意識できるようにしている。10 月～1 月には、月 1 回のペースで模擬試験を実施し、各自の実力の確認、弱点の発見と克服、次回の模擬試験に向けての目標の設定をし、本試験に向けて計画的に受験勉強が進められるようにしている。さらに、12 月末の社会福祉士国家試験対策講座終了後には、2 泊 3 日の勉強合宿を行い、同じ志をもった学生とともに切磋琢磨し合格を目指し、これまでの学習の整理と、勉強のリズムを維持できるようにしている。模擬試験の結果をみて、学生にはアドバイスをし

ているが、一人ひとりにあったきめ細かな学習支援を早期にいかにつくっていくかということと、既卒受験生への対応をどのようにしていくかが課題である。

最後にこれまでその現状について説明してきたラーニング・アウトカムズ測定・評価のためのアセスメント・ポリシーの適切性を定期的に検証しているかであるが、この点は 2018 年度に策定したアセスメント・ポリシーによる測定・評価は今回が初回であり、この後述べる点検評価の効果と改善すべき事項にしたがって、できるだけ多くの学部専門科目で、４年ごとを目安に定期的に実施し、その適切性を検証していく予定である。

## ２．点検・評価

### （１）効果が上がっている事項

アセスメント項目（２）＜母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる＞のアセスメント指標３の TOEIC 等のスコアについては、今回は TOEIC のスコアに限定して点検したが、この項目の学習成果の向上については、記述のようなさまざまな取組によって一定の効果を上げることができた。これを、一層の成果の達成に向けてさらに発展させていきたい。

### （２）改善すべき事項

アセスメント項目（１）＜人間と社会と文化に関する基礎的教養と専門的学術を修得し、諸事象を精確に理解し、鑑賞し、評価することができる＞のアセスメント指標指標２：教員採用試験（社会・地歴・公民）の合格者数、およびアセスメント項目（２）＜母語および外国語を用いて、的確で豊かな自己表現とコミュニケーションを行うことができる＞のアセスメント指標指標２：教員採用試験（英語・国語）の合格者数については若干の増加傾向にあるものの、学部としての組織的な取組としてわずかに教職志望者の年 2 回の開催のみであり、一層の改善が必要である。教職課程の再課程認定を受けた学部としても、もっと多くの教採合格者を出す取組が求められる。

社会・地歴・公民科の関係科目の担当者からは、合格する学生の特徴として、①「何が何でも教師になる」しっかりとした動機と強い意志がある、②前向きな明るさがあり、人が好い（人なつっこい）、③失敗してもくじけない精神的タフさ（自分を客観視できる）を持つ、④計画性（課題もきちんと出す）があり、研究熱心である、⑤物知りでオリジナリティー（ある学生は歴史のゼミで「トイレの歴史」のプレゼンをやった）がある、⑥協調性（仲間と情報交換）がある等の指摘がある。不合格の学生は、これらがかなり欠けている、もしくは弱いという。

また、英語科関係科目の担当者からは、合格学生の特徴として、①３年次段階で教採を受ける強い意志と計画性が見られる（英語教師になるために英語圏に留学するか、学内の English Forum や Chit Chat Club に参加）、②英検準１級または TOEIC730 以上を取得している、③通常の授業も真面目に取り組み、ほぼ無欠席で好成績を修めている、④小論文の力をつけるために夏休みや春休みの教職キャリアセンターの講座に出ている、⑤教採仲間で勉強会を開き、情報交換をし、模擬授業も行っている、⑥サークル活動においては、グループをまとめたり、運営に携わるなど積極的である、⑦学校ボランティアやインターンシップに参加している、⑧性格はおおらかで社交的で協調性に富む点等が指摘されている。不合格の学生は、英語の力があっても真面目さ、実直さ、真剣さがなく、面接で不合格になる可能性が高いという。

さらに国語科の関係科目の担当教員からは、合格学生の特徴として、①自分の受けた教育や恩師に触発され、「こういう教師になりたい」との強い意志がある、②教育実習先で指導教諭や校長から信頼され、実習後もよきアドバイスをもらっている、③やや堅物だが、明朗で物事を明るく捉えら

れる、④子供が好きで、生徒にも好かれる、⑤文字を大切にし、綺麗な文字が書ける、⑥敬語が使え、マナーがよい、⑦文学作品を理解できる、⑧サークル活動でも中心的である点等が指摘されている。不合格の学生は、日常的に遅刻が多く、レポートや研究発表の内容がずさんで、何度も同じことを注意される傾向があるという。

学部として改善すべきは、まだまだ不十分な、これらの合格者の特性をもつ学生の育成に組織的に取り組むことである。

## ３．将来に向けた発展方策

### （１）効果が上がっている事項

既述のように、TOEIC については、スコア上昇点からみれば、2016 年度、2017 年度いずれも、文学部における英語教育力の効果が実証されたといえる。そこで更なる発展に向けて、少子化を背景とする今後の入学志願者の減少と英語能力の低い新入生が増加することを前提として、今後の TOEIC スコアの底上げのための文学部の現実的な方策を以下に示したい。

①ポテンシャルをもつスコア停滞層への対応

方策の 1 点目は、初回点と最高点でスコアの上昇がみられない学生層のうち、スコア上昇が見込まれるポテンシャルをもつ学生に対して英語学習を喚起することである。表 7 は 2016 年度、表 8 は 2017 年度における初回点と最高点の得点帯が同じであった学生のクロス集計（299 点以下から 695 点まで）の結果である。

まず、400 点～495 点のスコア層では、初回点 400～495 点と好得点を取っている学生層のうち、2016 年度では全体の 42.9%（54 人）、2017 年度では 45.2%（57 人）という構成比、実人数ともに多数の学生が、最高点でも同得点帯にとどまっている。同得点帯は全国の大学生の平均スコア 444 点と同じ得点帯である。文学部入学時にすでに全国平均を上回る英語力のポテンシャルをもっているにもかかわらず、その後、これらの学生層のスコアが伸びていない学生が存在する。これへの対応として成績 UP の方策が必要である。

**表 7：2016 年度スコア停滞層の構成比**

| | 295 以下 | 300-395 | 400-495 | 500-595 | 600-695 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 30.4(35) | 35.6(88) | 42.9(54) | 33.3(24) | 26.7(8) |
| 4 年生 | 31.5(23) | 36.6(70) | 45.8(38) | 42.9(15) | 23.8(5) |
| 5 年生 | 28.6(12) | 32.1(18) | 37.2(16) | 24.3(9) | 33.3(3) |

（　）内は実数。

**表 8 ：2017 年度スコア停滞層の構成比**

| | 295 以下 | 300-395 | 400-495 | 500-595 | 600-695 |
|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 44.4(84) | 45.6(98) | 45.2(57) | 42(21) | 18.2(4) |
| 4 年生 | 47.7(72) | 56.1(83) | 49.4(43) | 55.2(16) | 14.3(2) |
| 5 年生 | 31.6(12) | 22.4(15) | 35.9(14) | 23.8(5) | 25(2) |

（　）内は実数。

次に、 500～595 点のスコア層では、初回点で 500～595 点を獲得し、この時点で全国の大学生平均を上回っているスコア層のうち、2016 年度では全体の 33.3%（24 人）、2017 年度では 42.0%（21 人）の学生が、最高点でも同得点帯にとどまっている。初回で同スコアを獲得できる層は、文学部のなかでは英語が得意な、あるいは英語が好きと自覚している層であろう。しかし、これらの学生層が、4 年間の在学でスコアが停滞している点は大きな課題である。

初回点と最高点に変化のない 400～499 点、500～599 点をというポテンシャルをもつ学生層に、十分な英語学習の動機付けが与えられていないことを学部として自覚し、これらの学生層の特徴や特質を分析し、十分に説得的な動機付けの方法を模索したい。

次に標準層（300～395 点のスコア層）への対応である。初回点で 300～395 点を獲得したまま、最高点でも同スコア帯に停滞している学生は、2016 年度では全体の 35.6%（88 人）、2017 年度では 45.6%（98 人）と、文学部で最も多い人数のスコア層を形成している。この標準層は、現在の文学部生の英語力の水準を端的に表しているとみてよい。では、初回で 300～399 点のスコアを獲得する学生層は、その後、どのような上昇をはたすのであろうか。

ここで、標準層の上昇スコアの構成比を見たい。表 9 は 2016 年度、表 10 は 2017 年度のものである。（TOEIC スコアに関する資料より）

**表 9：2016 年度 300～399 点スコア層の上昇スコア構成比**

| | 400-495 | 500-595 | 600-695 | 700-795 | 800-895 | 900 以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 31.6(78) | 17.8(44) | 9.3(23) | 5.3(13) | 0(0) | 0.4(1) |
| 4 年生 | 33.5(64) | 18.3(35) | 7.3(14) | 3.7(7) | 0(0) | 0.5(1) |
| 5 年生 | 25.0(14) | 16.1(9) | 16.1(9) | 10.7(6) | 0(0) | 0(0) |

（　）内は実数。

**表 10：2017 年度 300～399 点スコア層の上昇スコア構成比**

| | 400-495 | 500-595 | 600-695 | 700-795 | 800-895 | 900 以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 21.4(46) | 17.7(38) | 7.9(17) | 5.6(12) | 1.4(3) | 0.5(1) |
| 4 年生 | 18.2(27) | 14.9(22) | 7.4(11) | 2.0(3) | 1.4(2) | 0(0) |
| 5 年生 | 28.4(19) | 23.9(16) | 9.0(6) | 13.4(9) | 1.5(1) | 1.5(1) |

（　）内は実数。

たとえば、初回点 300～399 点から最高点 400～495 点に上昇した学生は、2016 年度は 31.6%だったのに対し、2017 年度は 21.4%に低下した。同じく、さらに上の得点帯を 2016 年度、2017 年度の順にみると、500～595 点は 17.8%・17.7%、600～695 点は 9.3%・7.9%、700～795 点は 5.3%・5.6%、800～895 点 0%・1.4%、900 点以上は 0.4%・0.5%となっている。

これらの結果からわかることは、現状では、標準層の学生が入学後に TOEIC スコアでシュリーマン賞（730 点以上）を受賞する割合は 5%程度、ダヴィンチ賞（920 点以上）獲得にいたっては 1%にも満たないという事実である。これを中期・長期留学をしていないと考えられる 4 年生でみると、シュリーマン賞は 2%、ダヴィンチ賞は 0%（2017 年度）となる。この事実を受け止め、まずは、標準層の学生が 400～495 点、500～595 点へと上昇できるような、現実的な対策を立てることが必要となる。そのためには、標準層からこれらの得点層に上昇をはたした学生の諸データを量的に分析するだけでなく、聴き取りなどを行い質的な要因が何かを探索することが重要になると思われる。

最後に 初回点、最高点ともに 295 点以下のスコアにとどまっている下位学生への対応である。初回点が 300～395 点の標準層と同じように、初回点が 295 点以下だった学生の上昇スコアの実態をみたい。表 9 は 2016 年度。表 10 は 2017 年度のものである。（TOEIC スコアに関する資料より）

**表 9：2016 年度 295 点以下スコア層の上昇スコア構成比**

| | 300-395 | 400-495 | 500-595 | 600-695 | 700-795 | 800-895 | 900 以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 40.9(47) | 17.4(20) | 8.7(10) | 1.7(2) | 0(0) | 0.3(1) | 0(0) |
| 4 年生 | 42.5(31) | 16.4(12) | 8.2(6) | 1.4(1) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |
| 5 年生 | 38.1(16) | 19.0(8) | 9.5(4) | 2.4(1) | 0(0) | 2.4(1) | 0(0) |

（　）内は実数。

**表 10：2017 年度 295 点以下スコア層の上昇スコア構成比**

| | 300-395 | 400-495 | 500-595 | 600-695 | 700-795 | 800-895 | 900 以上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 全体 | 29.6(56) | 14.3(27) | 8.5(16) | 2.6(5) | 0(0) | 0.5(1) | 0(0) |
| 4 年生 | 29.1(44) | 13.2(20) | 7.3(11) | 2.0(3) | 0(0) | 0.7(1) | 0(0) |
| 5 年生 | 31.6(12) | 18.4(7) | 13.2(5) | 5.3(2) | 0(0) | 0(0) | 0(0) |

（　）内は実数。

一瞥して明らかなように、下位層の上昇スコアは、標準層以上に上昇が困難となっていることがわかる。いうまでもなく、下位層は英語が苦手、または嫌いと自覚している学生層である。これらの学生層に対しては、標準層以上に現実的かつ説得的な対策が求められる。まずは、300-395 点の得点帯に上昇できるようにしたい。そのためには、初回で 299 点以下のスコアを獲得したあとに、最高点で 300-395 点に上昇した学生層の量的分析と、学生生活のありようを加味した質的分析を行い、下位層の上昇をはかっていくことが必要である。

### （2）改善すべき事項

教員採用試験合格者を増やすための発展方策としては、(ア)上記の特徴のある学生を見つけたら、できれば 1 年次の段階で初年次セミナー担当教員などから教職を勧める（登録して 3 年かかるので早く始めさせなければならない)、(イ）夏休みや春休みに教職キャリアセンターが開く講座に積極的に出させ、4 年間モチベーションを維持させる、(ウ）2 年次の「文学の学びとライフデザイン」でも教職という仕事についてよく取り上げる。(エ）教職キャリアセンターとの連携を強化し、合格した先輩とつなげる機会を拡大する、(オ）教採仲間の勉強会に学部教職委員会等の教員が加わってアドバイスを与え、留学の相談等にのり、期限付き採用にも多くの利点があると励ますなど、(カ）学部の日本語関係科目で、意識して言葉遣いやマナーを教える、(キ）現在置いている学部の「多彩なプログラム」の「教員養成特修プログラム」を改正しより実質的な教職向けのプログラムにし、また関連する勉強会を用意する、などの諸点に取り組みたい。

## 4．根拠資料

①「カリキュラム・マップ（『2018 年度　文学部での学び方』)
②「ラーニング・アウトカムズ評価のためのルーブリック表」(『2018 年度　文学部での学び方』)
③『2018 年度　履修要項』
④「『演習』と『卒業論文』の評価のためのルーブリック表」(2018 年度 3 月教授会資料)
⑤「担当科目自己点検のためのコメント」（文学部作成）
⑥ 成績に関する教務部資料
⑦ TOEIC スコアに関する資料・同関連資料
⑧ 異文化理解アンケート
⑨ 異文化適応能力アンケート
⑩ CASEC スコア資料
⑪ 社会福祉士国家試験合格者数資料